



雙魚鱗

~ 13
3584
1



五冊々々

13
3584
1



早稲田 大書 館
35.2.2
和 書
振入



秋長左衛門あきながざゑもん疑うたがひかりを寃罪むづかひうつ陥おちるを支しと述つ

○夜鶴よりのつる

長左衛門ながざゑもんがの經室のりむろ阿闍あせつ前まへ見み蝶てつ吉きちと捕とらへとるを支しと述つ阿闍あせつがの

志操しそ蝶てつ五郎ごらうがの俠氣げきと賞あやせとるを支しと述つ縹ひら染ぞめ鴨鴨頭づか草くさ二家ふたゑと謀まくを

拐か兒わらわ乃の盟主めいしゅ發は覺かく支しと述つ

戀衣こひぎ

長左衛門ながざゑもん死去しよき阿闍あせつ娘むすめ礼れいとの腰こしをとりて事こと阿闍あせつとの謀まくを

郎らう一人ひとりのの義婦ぎふ結むす末すえ河か盜たうみの衣ぎ二人ふたりとの謀まくを

雙ふた蛺蝶てつてつ白しろ絲いと冊子ふし五ご帙し標ひら目め終はるを



花子
あき
ま
つげね
おろけも
蝶のたをされ
名ふあつる

○鴨頭草蝶五郎孝廉



書未なふ
力あつる
ちれ連
あつる
あつる
こふと
あつる
あつる

○枚蝶吉方正



○周防室積遊君五孀

たきのよ
まゆえ
さのき
ささで
流木
あらん
恋れ
山後



○山口與五郎義順

たの
まゆえ
恋
山
か
あ
り
れ



○ 叔長左衛門後妻阿關

郭公うまね
子ゆゑれ
畧なすれや

なほら
ちと
まよ

軍
その

○ 南方十次兵衛女



阿石

三才
入るそ
うらたれ

色香
志願
深谷の
もくき

けあも
めづらん



左近衛將曹
國網靈

雙蛺蝶白糸冊子第一帙

東都 芍藥亭主人著

○ 胡蝶の巻

大和の國諸越の里と。往昔大に仇國が住し余波とて。馬追ふ男
 柴賣翁が庭に籬結ひし四季の花を植て。鳥うらら鶴も
 玉ももろ塔。水々どらどとして是を上かきと樂としる。秋を焚く
 奇状のつらな。室の籠て不時を催し。人子諺刺を合し。花
 とあて。郭橐駝が生し。つらねが如く造化のまをまに。花
 の花より色香も持し。蝶といふ蝶のむぎと集り。行
 をとほぐに裁く苑母は。不異。秋をこめて袖を連。有
 府訪する人の多し。中ふ周防の國大内家の士校長元清門正直

小君の使として華洛舟上へ主君義興の起居伺へかつる。南宮の名勝を捜へて見巡ついで此里の菓をんとて花の家の此花ありあそび。あつね眺みえとれてまゝ時にもひとりの蜂を捕りて刺さる。それを携へる扇ありあげてまゝさうつ蜂を弄あがりて脱行さる。鉄蝶の虫もなく飛ぶを過りて撃殺ね花主長九浦つよひひて此里の花を枝へ原生活の爲もあつね。いとも知らずん学生佐玉がめと夕暮てなり。蝶と佐國が果ぞとて稚兒もても憐れ指さる。さうと蜜を沃水と灌ぐまゝも多し群集とられしとあり。風俗を我苑再して其蝶を殺さる生憎し。春日野の鹿を官より捉り諸越の里は蝶を世人の哀とえざるさうやしされ疾去り。糸とめらふまゝ。長た蒲門も我苑の爲よすまゝ。蝶の爲よ不末

花ふと身を奪ふれむと蝶と撃殺されとけがやと出行き。夫より四五日ぐわどにらぬくえとさうて困ふ歸り。此の妻の麻田ふ語り世のしとさるもあつねのぞとらふ。妻も指を屈つ伸しつちと最あやし良人の蝶を殺さる日なぐらり。妻庭に出て策ふ蜘蛛の園のわとれを糸して打拂ひ不慮とえあけられ。楓葉のまろふ漆をじめた花西の枝より籬まかけておさなる。蜘蛛の細張とれに一の大やうな蝶のかつてとめられ。けれど翅あがりてあて脱と不得蜘蛛を眼はとくすまゝとめりてあそやとさる。に。あうりな虫ながら蝶の美蜘蛛の醜競とは彼とあつね。いとどして常よりあつね。細も残なく打破さる。蝶は拜む。三度して去ぬ。蜘蛛といふまなり。けん不知。命とさかりあつね。虫も

かゝれるやあるべし。武門の生ともいふも益なきと殺生とていふも
 身へ良人日未特漢の業がそのみあるを諫めれど。さうもいふもいふも
 こそうてまればとて時よ。てやおひあひも語はく。お長を武門
 打笑て我扇を殺人劍。その幕を活人刀をふ生殺よと。流し
 よしや公ありて殺さとも小虫なんぞ人の禍福を易するや。人雀
 成養ひ。鯉を放して福を得る。と書ゆも載は信とて。おれを
 株を守ると。兔を待徒なれば。と公ゆも。さういふれば。妻もさ
 て。あつそらど酒飲う。夜も中更。それを聞か入んと。さうお
 大なる二の蝶を来り。東へ進み行。西へのれ互に家のうちら。お
 入らん。入。とめら。さういふ。二人を目もと。さういふ。お
 手飼の猫。簷に。と。い。と。規。既。捕。と。跳。を。鈴。の。音。や

驚とけん。一の蝶を屋上よ。お太。一の蝶を軒。入る。と。い。え
 ちが。さ。も。に。形。を。え。う。し。な。ひ。ね。此。月。より。妻。の。麻。田。唯。な。ぬ。糸。と
 形。り。て。あ。う。れ。十。月。再。男。兒。中。と。う。の。産。お。と。せば。二人。の。歡。ひ。大。と
 あり。は。名。を。長。吉。と。号。て。育。ち。れ。に。い。と。け。な。れ。より。蝶。を。愛。る。事
 他。兒。お。か。う。り。し。より。人。を。蝶。吉。と。よ。び。ま。す。蝶。吉。四。支。の。時。母。の。麻。田
 糸。の。かり。て。家。中。任。さ。れ。る。の。好。く。蝶。吉。も。い。と。と。さ。は。乳。母。の。手
 ひと。り。あ。て。ま。お。ほ。つ。つ。な。し。継。配。を。婿。よ。と。血。属。奉。て。ま。し。ゆ。れ。し。和
 漢。の。跡。を。考。へ。継。室。の。婿。て。前。家。兒。の。全。と。解。し。家。事
 締。め。た。賤。失。ぬ。不。過。家。半。整。ひ。と。嗣。を。危。く。せん。あ。の。好。ま
 且。り。と。頭。を。揺。く。う。け。が。い。は。二。三。年。と。い。ふ。後。長。を。捕。り。お。ま
 も。近。き。れ。へ。公。を。扶。け。る。家。の。事。と。り。は。う。な。り。せ。よ。實。ある。者。と。い。ふ



阿闍と云ふ女の年齢三十にありける。其人のまじりて。長た富つて。居の不自由。而殆倦。これ耐なれど。今ハいり申さく。幸ひのめぐて。よゆののり。打任せたり。此女容儀の醜く。ぬののり。公操正しく。実中。あて。紡績裁縫の業より。薪水のり。まて。むより。た。とて。益。益奴。婢を滅し。長た。富つ。小仕へ。蝶吉といと。し。前室。あも。違。お。た。ら。ま。さ。り。て。え。え。ま。れ。ば。親戚。奇。奇。り。て。や。ぐ。て。正室。再。定。め。さ。り。その。ち。と。妻。の。耐。より。控。り。の。ご。と。慎。て。諍。り。と。れ。け。と。ひ。露。む。り。も。え。え。ざ。れ。ば。その。頃。の。ほ。め。その。あ。ぞ。な。り。り。れ。此。阿。闍。と。い。つ。れ。と。此。國。の。鴨。野。草。村。の。農。夫。長。藏。と。い。ふ。り。の。妻。あ。て。一。子。の。蝶。五。郎。が。う。り。と。い。ふ。年。に。長。藏。へ。あ。ま。かり。親。族。の。中。に。て。も。南。方。十。次。兵。衛。なる。者。と。近。た。あ。り。て。あ。は。雙。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。の。も。な。り。と。家。と。富。な。が。り。性。質。

各。畜。使。て。人。の。あ。れ。む。事。な。え。て。好。く。その。他。の。もの。を。公。操。と。ま。り。く。し。ま。れ。ど。皆。兒。な。ど。多。く。あり。て。自。の。生。計。に。心。を。使。せ。ざ。れ。ば。憑。が。と。も。う。づ。う。づ。の。田。畑。售。代。は。些。の。所。録。あり。て。室。老。冷。泉。兵。衛。の。兒。小。太。郎。が。乳。媪。と。な。り。て。仕。て。兵。衛。原。篤。實。の。資。性。あ。り。不。諂。不。貪。の。み。と。人。の。艱。難。を。救。ひ。た。れ。む。に。家。日。お。と。ひ。て。貧。乏。と。な。す。に。不堪。小。太。郎。が。七。女。の。年。再。暇。を。乞。ひ。蝶。五。郎。と。あ。づ。け。置。く。長。た。富。つ。が。妻。と。な。り。し。と。自。後。の。榮。を。と。か。れ。み。と。あ。り。て。俸。錢。を。兵。衛。の。家。お。か。り。て。小。太。郎。蝶。五。郎。が。字。字。學。文。術。馬。射。藝。刀。法。鎗。術。よ。ゆ。の。り。の。り。と。學。を。れ。資。と。し。ぬ。か。く。は。と。み。と。常。あ。は。往。來。も。為。ざ。れ。ば。長。た。富。つ。と。古。主。の。貧。乏。を。え。は。ぐ。と。の。と。お。り。ひ。居。と。蝶。五。郎。が。の。り。と。愛。知。と。い。と。に。一。ち。り。扱。也。

年の関守人如く蝶吉とくように生うらて。十四といふ年、
材五尺五六寸ありて容貌の美麗も不似臂力群れ秀て角能
をこのこととて対手なれぬといひなれ壯士あやかりねんと示
りくせむおもとれまね。一日驟雨暗く薄暮み浴して浴衣
斗う副刀服をさみ門あつた石は腰打のけて涼を居しお儀あつ
その人うまびすく走らうか何事とときあがりえる間もなく一頭
の奔馬蝶吉が面あつて跳するや、高木履めて勢の踏
をまうと踏し木敷の齒皆地お没馬とそのあがり跳躍と追ひ
まじり馬主とりのきめぬ蝶吉が幼年にして怪力と怪うさげの
かありた。これより相撲とりて拵が射のやうて放駒の蝶吉と名
告まうり又同姓扱十郎なれりの新井庭とはるる泉も次穿

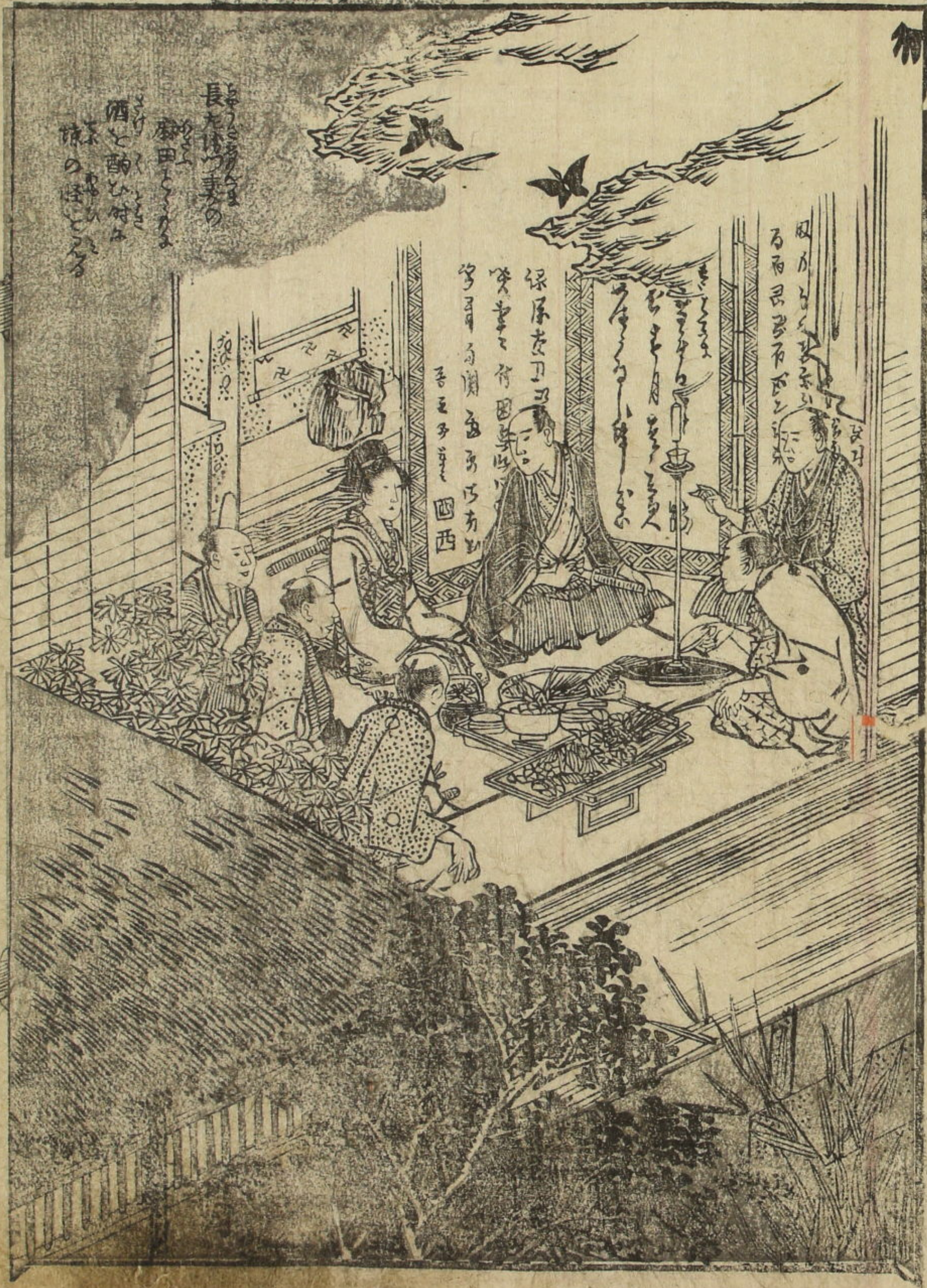
仮山と築石とも多聚りんとして。先ひとりの謀計をまうけさる
もかた石ひとりの高き價と出しと買入られぬとこれを信ずる者
我もくと大なる石とも多持集。邸前とらまらに奇巖怪石
競鬻石主と我のうは互お價の高下といひのありて述べ
なるとり宿りとも。今日とまると明日となれども邸中より出直
同の人絶くなかりまねを。今と堪う移て打連どもら邸より
そのはしらひ入れぬ。石と望とと懸るし誰か持てまうと跳
これあのかく邸あつ積重ねるまうとえらじ。さうまうこの
来いもんとすれど主もさうなうげれをすて置しなりと日
の暮んもて再残なく持去ばし翌日でも捨あうばあはれとじ
といひおどろかせむ。石主ともおめひのわうなる事やと孤小

魅されまんと眉かたなでけり力なげ小立出まり始りてよ直
小雀んとて勢もよく多の人夫雇て持とせつれ今不售
とて持帰らん人夫雇て換と重るれ母もあふんて中書
ちひされまはげややく二三人は語ひあり。狸母を扱
て荷ひ連運びしが。文なれそのまうすておれ我のまを
跡より追ひ公持して逃れがぶとくありひくに去て後又其
ふ者もなれまうに公ふかるひとれ石ども入り入とく。あふま
に庭をはらうまはしあふりがほ小仕事ほらういふと。長な掃つ侍
申て司姓のはしこまをておれがく十郎がりとに事りて此れど
かゝれりひしが實おておととや。卿を僕が十倍の采地を賜て
何の不足ありて人と欺とて物に掠れまれりしとくふぞ其

石をりてまうとれ池水を盗泉お不殊。主が訪て返されとも
價をけくなふとも為られよといふ。十郎おひもかけね顔色し
て彼輩たのともせがれお大なる石どもを運あり。我門あよとて
金で狼藉らむむろりねし。止りて不得とり入とく。庭中居る
むりなり。益なれまの母高を價とらとせられ。謂はし。お帰んと
たかいたなごり返へふとんと取ありと。長九掃門膝立座し
卿良馬の骨を買入謀て用たり。はらうての儀にさるり不見え
人やめれま。門がむに運び出ししぬや。僕其主と問て返
さしいうまや何おと詰よとれ。十郎冷笑ひ。卿の一念今おは
めぬりおがら。顔え入ぬ石主の荷擔あく。血脈とひはし同
姓とあらまひのしとひら。幸やめれ。石ども原のごとく運び

出づ標れを立日次限りて石主の持本仕色し此後のる御の
関奉にあつべといふ。長九猪門も石主を返わらば世に議論
もなかりん頼の承諾僕も於てよ終とどしとて帰る。十郎
ととじり取母不来るの今更何とておれべと。限の日数
再とり入る我物と為と。ひとりらおづらて翌日奴僕も命
て門前より出せ大がれを三日の内取去と。は
書あしき。長九猪門の家へ歸て人夫出して力を扶く。は
車の用意せよと詳お誌て城門の出口に貼せ自財を擲て多の
人を雇んと。蝶吉止めて家君多れ人夫を引つとて行むらんを
十郎主のおもんやどもいふなり。兒お任せも人よたふと。ひ
このひなんといふ長九猪門おぼけなくもおひかながら。蝶吉

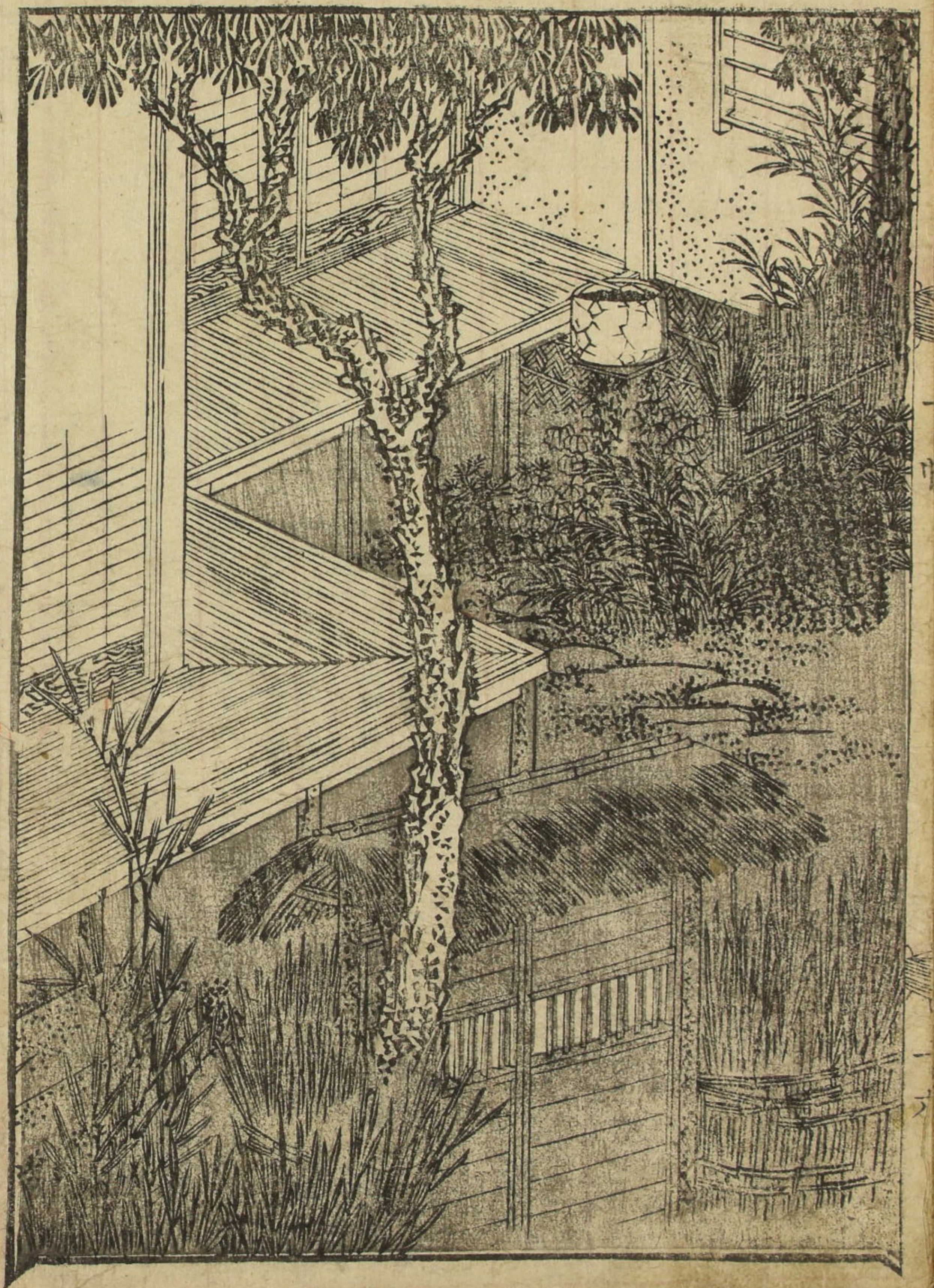
日車幸よりのものとあびて見ゆれば女のはいも試んをやとて請
母よりせちりの石主どもをれをこく人夫を貸んとあれを力めて
おそろく地車曳て出まり。形を大にえゆれども年ハ赤十四五
むかりなれ美少年一人袴のそば高くとりて立たれむりて
外母人なれふゆれなむせんさなく。一の車に二むり石を載せ
四五人して曳んとすれどいと重げめてさうゆくもええと。は
蝶吉つと寄て我お任せ。東去。西行と。北も帰。南も
運むんと。それ者。圃をとりて前後を定よ。四方一里はほどハ我が
かえて得せんといふお皆らけがら顔色なれをきひて一二
定む。道の遠近を問ひ。總太く縷合せ車と次身お敷か。を
同てと大さなれ石どもを好らうに撃手積並ぶれよと。いりおされ



長たけの妻の
酒と酌い付
林のほこる

保原を
笑まて
字月る
吾多
西

一失



一六

事といふ不知と先方のとされし其目や又合せ守て居れ蝶ま
一人前なる車の綱をとりにて徐くと曳行す。驚きとくる車の
八両積とれる石の重と致百貫目なれを。顔色自若息も不喘
その其怪かみ驚れと舌縮足癢と詞を告げり。斯くして
日の夕暮もと命波なく運びとて。故十軒が門あけ磔をのり
石もほし。又或時龍福寺といふ禪刹み藤花の盛なれを
とて一人の奴を具して行けるに。院主と父長九清の友あて團碁
がらのとゆれど引とめて何と賭みせんといふ。僕輸を一籃の
真とまらふとぞし。僕贏むゆれなれ。花湯へといふ。院主笑
て僕人胡人一の馬不騎張文成が宿賭不類て。勝も負も元倍
手利よし。されど友を失ふと真と得。まらぬと。微笑す。碁

を下きにづけてと局まで蝶吉贏と。まれど。さうば友松と
共賜んとて。十圓むかりなれ松と藤のといひまらとる。根
より引ゆとて家おぞ帰てなれ。足ホのり。主君義興の聴よ達て。
二男山口五郎義順の侍臣み徴と新お俸禄を賜ひたり。

○ 櫻花の巻

後栢原天皇文龜永正の頃。関西小覇より。周防の團山に
なれ。大内左京大夫多く良。我真の世系。なげゆれ。鼻祖百
濟國璋明王の子琳聖太子。皇國推古天皇十九年。歸化國防
の。佐佐木郡多良濱。舟航をよせ。七世の齋長門守正。垣長門
此國大内の縣。舟居と。トてより。多良と姓。と。大内氏と。と
正。垣十五世の孫。左京大夫弘世の時。ふりて。周防長門石見

之洲の守として威權をばりて大なるしうば。長臣山々城を築
久事次請ふ。弘世の祖先代に此地に城を構ふれり。保固
在徳不在險を志し。善作を四海皆見。身也
悪を行は。臣子悉讐敵。ことごとくけがらむ。これごの代より
築山の館藻をさへ飾をまじ。花の晨園の屋敷。金の鈴。繫
月の夕池の釣殿。玉の扨。花。夫人を。御神家より。婢。後
と都のおもかげを。さへに。うらんとて。薪。花。折。添。ご。は。市。お
鬻。こと。や。ぬ。さ。げ。衣。お。香。を。炷。添。ご。外。お。ぬ。ぬ。を。し。し。い。
宮野の妙喜寺と。し。め。し。て。園。清。香。積。寺。觀。音。寺。法。泉。寺。
妙花寺と。創立。氷上山に。神。殿。仏。舎。鐘。樓。經。花。又。倉。丁。塔。を。
と。一。百。余。の。傍。房。を。造。り。本。宮。お。も。わ。は。妙。見。の。尊。像。本。堂。お。

釈迦文珠普賢四大天王を居又山口の度さ五里の間。石地あり
ふれを車通りがしとして深さ五尺をかり。小石を填り。その仕
麗奢移。秀衡が平泉。ゆも。ま。ま。り。ぬ。を。當。時。の。人。を。大。内。家。に
覇業。此時。基。せ。り。と。後。と。び。り。ん。後。世。の。人。の。大。内。家。の。滅。亡
此時。兆。せ。れ。を。悲。し。ま。ん。や。夫。より。七。代。を。経。て。今。義。興。の。時。に
周防長門石見。後。安藝。豊。前。筑。前。七。州。を。併。せ。尼。子。大。友。の。強。次
拉。威。九。州。を。壓。し。三。好。希。雲。の。猛。や。戮。して。名。帝。京。を。動。去。承。正
五年。前。將。軍。義。植。卿。お。從。ひ。て。皇。城。お。入。り。畿。内。山。陽。西。海。の。成
敗。を。掌。り。管。領。お。補。せ。られ。と。品。お。の。ほ。り。華。洛。お。在。り。十。一。年
母。して。同。十。五。年。本。國。お。下。り。石。見。に。國。お。残。り。尼。子。経。文
が。属。城。を。陥。出。雲。の。山。と。席。の。お。と。く。巻。ん。と。て。あ。が。り。く。銳。氣。城



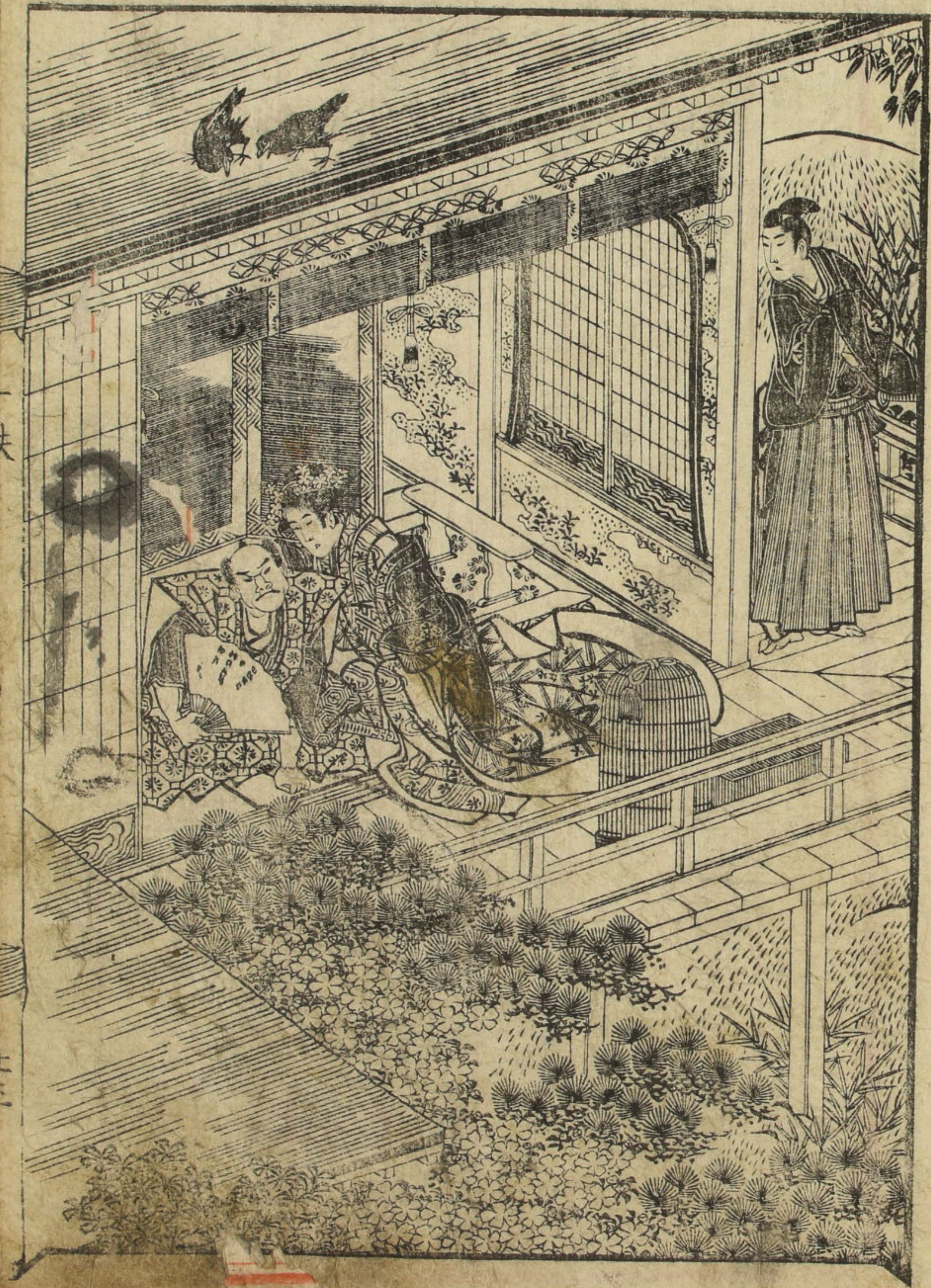
養ひれりれみ。軍旅の道おこるふとみし。士人々血と敵の報よ
撫ぐ美酒よ舌と鼓。農高を貸と埋の憂。天忘とく鮮衣の袖
次連ね家々皇都の俗ふそ。く花美の態みらけりちり。こ
義興十年あり在り。玉人部のよりみ。なれ安な世のこ。非
ご年。乱といと。公卿をじ。め。学生。詩僧。書家。畫工。伶人。醫
師。卜者。廟官。道士。巫女。猿樂。牙婆。繩伎。男娼。行立。聖歌。妓。舞。姫
狎客。遊俠の徒。ありと。り。と。め。書と携へ。都より多入。一故。ふ。丁。を
此。義興。お。二人の男兒。一人の女子。お。じ。り。り。嫡男。大内。新。介。義。隆
と。て。夫人の産。と。つ。度。子。と。山。に。五。郎。義。順。と。て。側室。曙。の方。の
腹。中。に。義。興。の。愛。持。あ。り。し。この曙の方。と。い。ふ。と。去。永。正。八。年
十二月。九。日。義。興。自。悉。内。の。より。か。り。日。枝。の。山。に。雪。あ。り。降。り

積り候ふ。

かくとらるるを。こ。あ。つ。ま。の。富士の根。と。今。ぞ。三。や。らの。雪。の。あ。り。ふ。の
と。詠。見。し。を。秀。歌。の。ゆ。え。高。く。雲。の。上。ふ。も。感。さ。せ。ま。あ。り。ひ。さ。り
に。賜。つ。せ。う。れ。女。房。な。れ。は。是。して。國。み。帰。ら。し。後。も。寵。愛。一
再。鐘。了。威。權。も。お。の。づ。ら。り。日。に。さ。ひ。て。所。生。の。五。郎。義。順。大。内。北。家
と。嗣。せん。と。お。り。ふ。お。ら。り。義。興。の。庶。兄。と。い。は。れ。る。光。と。て。氷。上。山
の。社。僧。あり。しが。還。俗。して。大。内。太。郎。輝。弘。と。い。は。れ。を。か。つ。ひ。義。隆。と
あ。く。詩。歌。管。絃。も。と。務。を。よ。せ。せ。兵。學。弓。馬。の。道。も。あ。り。せ
酒。色。を。す。め。て。父。も。諸。臣。も。疎。せん。と。ぞ。め。り。た。れ。國。老。陶
兵。庫。及。持。長。入。道。を。麒麟。此。こと。次。探。知。り。て。深。く。憂。ひ。嫡。庶。社。稷
と。あ。り。そ。ふ。國。の。心。を。北。なり。と。や。く。此。内。の。患。を。治。め。と。い。は。れ。り。

尼子大友の外孫と駈をたど。ひとりあつた。海峽いとせしうと。夫人先
年かられ多し。曙の方内におありて主君の行ひを乱し。輝弘外より
て諸士のころろを惑と。其黨多かれを容易に滅せしめ。曙の方を賜せしめ
鮮し。熟かりのし主君雪の秀歌に徳小よりて曙の方を賜せしめ
へ。永正八年十二月のしゆして。与五郎主の支干と。以推之。其土産の
年又永正八年。小島より。不賜以。おん通し。しひし。や知く。し
とし。いも。呂不韋。春申君。が。う。は。し。とも。い。ひ。が。し。新。今。君。の。風。慧
母して。放縦。け。れ。國。を。危。く。し。れ。の。質。なり。与五郎主の。頼。借。は。て
謹慎。な。れ。家。を。全。く。し。れ。の。資。形。り。易。之。と。國。家。益。隆。る。れ。は。し
られ。と。嫡。と。廢。て。廢。と。立。る。も。又。乱。の。階。な。る。ん。あ。と。れ。佞。奸。の。士。人。と
得。与五郎主の。侍。人。と。し。声。色。と。り。て。誘。せ。人。望。と。り。し。か。を。せ。當。主

小佳人と。ま。り。て。曙。の。方。れ。寵。と。棄。ひ。反。向。と。用。て。輝。弘。の。權。は。折
新。今。君。の。位。と。つ。して。曲。士。と。避。正。人。は。拳。バ。世。子。原。末。暗。弱。乃
性。は。あ。ら。び。過。を。あ。ら。ら。り。尚。主。千秋。の。後。も。復。憂。は。し。時。を
海。の。策。足。也。と。い。は。れ。あ。て。も。毒。石。と。以。病。と。攻。る。の。術。み。な。る。ひ。
与五郎主。み。な。る。せ。ん。小。人。と。注。な。る。ん。と。その。と。ら。と。い。は。れ。と。い。は。れ。て
諸。士。の。内。其。人。と。り。と。む。れ。高。丘。郷。在。濟。門。と。も。本。貫。は。加。賀。の。國
石。川。郡。の。劔。工。あ。て。家。祖。を。越。前。の。小。坂。島。の。人。な。り。し。が。華。洛
み。の。り。其。頃。雙。ヶ。た。良。工。末。團。俊。が。門。下。と。な。り。業。を。ら。け
友。重。と。名。告。千。代。鶴。九。國。安。と。一。雙。の。巧。手。と。て。世。お。り。と。い。は。れ。や
され。る。れ。う。老。年。お。お。い。と。石。川。郡。小。坂。島。の。泉。村。お。住。し。と。り。七。代
の。後。裔。お。三。郎。お。仙。門。が。第四。郎。在。濟。門。と。い。ひ。し。が。嫂。お。名。の。立。は。れ。と



一夫



長奥の側室
 曙の方の子
 与五郎と世よとんと
 お内を郎と
 大内を郎と

十一

十二

ありて所住とこぢ住まゐり同必高丘おなほたかかみとりて所住とこぢありて居いる
外あつち小為こゝろなれられ業わざもなれず越中えちゅうの園松倉郷のんまつくらが郷の領主りやうしゅなり
義弘よしかほが未葉みはなりといつてて々かたがた丸尾門まるおしと名なを改めあらた鍛録かたがたと
て二三年ふたさんねんきつていざいいざい住まりて其代そのよ小名こなありし其代そのよの
園園のん小住こぢ和泉守兼定わいずみかみさだがりとに寄客よりきやくとなりて在あらるら鍛煉かたがた
の術わざあり心こゝろもさめと酒食さけと貪あれの外あつちなかりあり義興よしかへ在京きやう
の町兼定とこぢが良工よきかみなりををて家いへの重寶ちゆうほう千鳥ちどりとりて
筑紫正恒ちくしせいこうの太刀たち又家臣いへ校民部がうじんぶが佩刀はいたう荒波あらいなとりて依よ依せ一文字いちもんじ
の刀かみの摸刀もつたうが命いのちられ露つゆくがらと鍛うめめられ兼定脚かみさだあしの病やまひ
發あつてつふより名代なしろにして京都きやうとに携よつつたた民部じんぶは諂とふと
部下かみの輕卒あいらとなり媚へつありくと口くちををりて發跡はつせき今諸士いましよし

の列ら入りい子こなまれば身丹平みんたんへいとよび迎むかへて家いへに居いて
武門ぶもんの事ことありおろそろめてお帯間おびまの術わざあり精せいそのあり又ひとり
三原みやはら有右衛門うゑもんとして譜代ふしろの士しなれど原はらは足あも備後びんごの国正家くにまさけと
りて刀匠たうぢやうの齋いはいめて少せうの文ぶん支しなり形かたちなり郷左衛門ごうざゑもんと公こうありて
色いろと察さつとととと術わざは長ながが利りををりてと妻子つしをも殺ころす
ててとととと者ものなり此この人ひとふりてこれのなりををりてとてやが
義順よしのぶの侍さむらいの負おんみぞらりて此こ一條いちじやうの事ことハ國くにの興廢こうふたいハ
ててととととぬるぬりて日夜にちや神かみををし食くへとも味あじもも睡ねもも
驗合けんががれむりてををりて又また國人こくにんの驕奢きやうしやに長ながきと憂うれひも
そひて權宣けんげんの道みちを行おこなひても風俗ふうぞくを矯あ純じゆん樸ぼくは復たさんとの志こころ
止時とどなりたあり日ひ郭外くわくがい巡見じゆんけん世よは構かまいと度たらうがれ家いへあり二

三人の少年擗の杖と折て走りぬれを此家の奴僕と云え
四五人して取とめ諍論くぬびとせれを従士と志て何事そ坐岡
とせぬ奴僕ら此少年主人の相識あもあふだしてみりぬ人
の門内に入りて氣とふるどおれをえあふ如く枝もまみく
折とりて走とれなり主人の帰てぬやあられハ僕を家とせり
居る甲斐なめん折とりたれ枝あふび幹は接はしはしといふ
夫城どもとめおふ言解く詞のたさけともあるぞれと斯め
そひ居て殿の通らせあふをもつやく知りたてしうふびとりこ
居る少年とあふり顔めて

遙望 人家 花便入 不 論 貴 賤 與 親 疎
と賦くれ詩をも弁へて

白浪の名あふりもよりの川花ゆきあづむる名とびいとじ
又

知る息の入るをももる世の中あふりもよりの名とびいとじ
と詠うれ故事をも不知風雅あ跡と男どもこそ便なけと主れ
帰てては酒とめてらめあふりもよりの名とびいとじ
と聞入ととせゆれハ道麒麟少年や近くめしよせと遙望人家
といれ詩白浪の知れ息のといる歌と何人の作なれとといふ
少年愕る風情めて詩と唐の白居易めて異朝あハ體の俗
たりとて白俗など賤いと皇朝ハ文章の聖と推尊び白氏
文集久く世あ行るれハ風流は志あれその詞ハ暗誦せと
らんや其詞を暗誦する者主不識家とてハ花入とて入る

河とがらぬ人やうづらるゑ。白波の歌も家隆卿の子隆尊禪師と
りくはる。或武夫の家小ぶりの花折をいひて、花を捕へられて折し、
ゆらされ出れ息の歌を、残しからぬ女房の花の枝、あまの折し、せと
通りたれを頼朝卿

のうらうらと折るゑのさうらう折又まゐるまゐる何をさうらるゑ

といひうけまじし。和歌なれぬ。大打童も知らばうひなんといひせ
もてぞ。及鶴大に怒てさうらの事誰う知ららん。さうら板本
写かみてせよ。行りたれ書ごもも。眼あり開める者と覽なるを天
下我ひとり讀るゑとおひ居あやわらうに人もなびらるゑその
いひねらうお花のうづらるゑと。いひ一白居易此國の守あもあらざど。
隆尊まはかゝらうて一時の難をのぐれ。景時が妻へ人家は花折

折らうたれあゐる。あゐる。折らうたれあゐる。あゐる。折らうたれあゐる。
い例あもひさかたし。えぬ異國人の詞と後援とし。あゐる。往昔人の
跡や掌故として濫せられ行ひと為るや。あゐる。倭人すもそれの斯や
の為業をして世に弄ひ人を惑と。雅事と禮法といひつらう。重たまの
狂人見懲りせよとて。全手や。折らう。折らう。折らう。折らう。折らう。
短冊お大板名もてとるぬと。びと。あゐる。追ひ放し。あゐる。又一人の
文學あうて唐山の事。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。
ど家あたる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。
操り。唐音と用らう。同僚親戚諫まども敢らう。あゐる。あゐる。あゐる。
に。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。
宜なり。賜あ処の月俸も。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。あゐる。



陶持長
 目俗
 人家
 知折人追



代少の異同あり。凡のところ支那の一石を皇朝の四斗余
なれべし。是より毎月四石五斗一年五十四石なり。は
月一石八斗余周年に二十二石ほど減らん。文學之驚き
て志をあらたけしとぞ。道徳が政事皆その類あり。時弊が故に
良臣の譽高く。父えて。因縁校内藤の輩へよと。恭じて。揚名の
大夫といわれり。

○此陶入道を近代ありが。忠臣めて。後義隆の代も貳
かく仕一子次郎。我清幼年母して。敏悟し。弓馬の
術詩歌の道より。小伎みし。され。て。こ。め。は。る。と。る。り。し。の。
義隆の行状と。誹と。墮落の。縮徒配流の。播紳と。こ。そ。い。ふ。は。
全。國。西。の。盟。主。武。門。の。領。袖。と。仰。る。は。良。將。の。あ。ら。は。し。と。樂。々

みひたれを。を。麒麟を。聞。く。内。匡。君。之。過。外。揚。君。之。美。
臣の道なれを。兒女智群。出。一度。父。く。明。朝。の。書。翰。は。
暗誦し。一度。父。く。幸。若。が。音。曲。を。歌。舞。と。ほ。と。と。に。吾。家。の。
龍駒。が。ら。少。年。母。して。主。君。を。誹。を。既。お。義。狼。の。性。あり。
後。末。君。の。讐。言。と。な。れ。る。者。ぞ。と。志。学。の。年。に。鳩。々。り。
桓公の臣石碯。が。子。の。石。厚。を。殺。せ。れ。志。み。申。た。ら。ん。は。其。
後。妹。婿。向。田。紀。伊。守。が。嫡。子。を。義。子。と。し。陶。五。郎。隆。房。と。名。
告。せ。さ。れ。此。隆。房。後。年。暗。賢。入。道。全。薑。と。稱。す。天。文。元。
年。主。君。を。義。隆。父。子。を。弑。し。同。二。十。一。年。豊。後。の。國。大。友。
左。衛。門。尉。義。鎮。が。弟。八。郎。義。長。が。ひ。う。へ。て。大。内。の。家。を。嗣。せ。し。
が。義。長。も。隆。も。弘。治。元。年。安。藝。の。國。嚴。島。の。合。戦。は。し。

六

自殺。痛。五郎長房二男小次郎皆死。君臣とも
國家破りしかひぬ。嗟道麒麟君の爲。後患を憂ひ。親子
縁清を害し。却て我子隆房がため。主を弑され。國が亡。事
を謀る人ふありて。その成と不成。天なり。事と成るは。

形をいふるのせし
りふし

雙蛺蝶白糸冊子第一帙 畢



五冊
ハ
イ
ハ
イ
ハ
イ
ハ
イ
ハ
イ



